

ようこそヤモリ御一行様

伊藤 洋文

Hirobumi ITO

一昨年、当時小学校四年生だった娘とのヒキガエルの観察記録をエッセイ風にまとめて、『外苑春秋』第三号に寄稿した。今回の第五号は、対象となる生き物こそ異なるが、身近な自然を題材として今まで知らなかった生物の神秘を探ったエッセイ第二弾である。今回の主人公は、ヤモリだ。実はこのヤモリ、私自身も過去に少なからず接点のある生物なのである。

一、娘最後の夏休み自由研究

(一) これまでの自由研究

早いもので、この前小学校に入ったばかりと思っていた娘が、いつの間にか最高学年の六年生になった。夏休みの自由研究も、も

う六回目を迎えることとなる。

その娘だが、父親の私の影響を受けてか、小さい頃から生き物が大好きである。唯一嫌いなゴキブリ以外の昆虫は平気で触ろうとするし、一昨年の自由研究で研究対象だったヒキガエルも、素手で平然と扱える。

先日、こんなことがあったらしい。娘の小学校で、六年生の児童が一年生の決められたクラスに行き、一年生のお世話をして何かの作業を手伝ってあげる日があったそうだ。娘が行くように指示されたクラスに入った途端、そのクラスの一年生も担任の女性の先生も、「怖い怖い」とか「キヤーキヤー」言って教室内がパニックになっていった。教室にハチがいるというのだ。しかし、娘はそれを見るなり、「これはハチじゃないよ。花に来るアブだから刺したりしないよ。怖くないよ。」と言って、両手で包んで窓の外に逃がしてあげたらしい。一年生やそのクラスの先生からとても感謝されたとのことだが、この武勇伝を聞いた私も、親馬鹿ながら「えらかったね」と褒めてあげた。

さて、一昨年の『外苑春秋』第三号にも記したが、そんな娘が一年生の時、初めての夏の自由研究で仕上げたのが、『パンダのけんきゅう』だった。家族で行った和歌山県白浜町のアドベンチャーワ

ールドで見聞きした内容を可愛くまとめて提出したのである。

二年生の夏には、たまたま訪れた沖縄のホテルの敷地内にいたオカヤドカリについて調べた。ヤドカリをバケツに何十匹も集めて、ヤドカリ自身の色によって分類したり、使っている貝殻の形で分類したりした。娘は、難しいヤドカリの絵も、一生懸命に頑張つて描いていた。

三年生では、うちの玄關脇に生えているサンショウの木にいたアゲハの幼虫や卵を採集して、飼育、観察した。この時にアドバイスしていた私自身にとっても新しい発見があったことから、生物教材としてのアゲハの有効性について論文をまとめ、『外苑春秋』第二号に寄稿した。(タイトルは、『観察教材としてのアゲハの有効性——小学校三年生での夏休み自由研究テーマとして——])

そして、四年生の夏に取り組んだのが、ヒキガエルである。これは実に面白く、思い出深い研究だった。是非『外苑春秋』第三号のエッセイをご覧いただきたい。

五年生では、家族旅行で兵庫県豊岡市のコウノトリの郷を訪れ、屋外の給餌場に飛来するコウノトリを観察、撮影した。そして、コウノトリについて博物館(コウノトリ文化館)の方にあれこれ質問したことをもとに、絶滅危惧種の保護について調べてまとめた。

と、このように本人も好きだし、私もアドバイスしやすかったことから、毎年生物ネタが続いてきた。その娘も六年生となり、いよいよ最後の夏の自由研究に取り掛かることになった。

(二) テーマをヤモリに決めたわけ

普段見過ごしがちな身近な自然を調べるのに、夏休みは絶好の機会だ。そこで、まず私が娘に提案したのが、野鳥の観察である。三章でもまた記す予定であるが、うちは少々ではあるが樹木の生えた神社の境内にあるため、窓から外を見ているだけで、いろいろな鳥類を観察することができる。神宮外苑でもよく見かけるスズメ、ハシブトガラス、ドバト、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバト、ハクセキレイ、シジュウカラ、ワカケホンセイインコ等のほか、オナガやコゲラなども飛来する。夏休みには見られないが、ツグミ、シロハラ、ジョウビタキ等の冬鳥が境内に訪れることもある。かつて驚いたのは、海の近くでしか見たことのないイソヒヨドリを見た時と、今年の台風通過直後に、山間部の森林でしか会ったことのないキビタキの鮮やかなオスの姿を境内で見た時である。たまたま見かけた鳥だけでもこれほどいるのだから、実際はもっと多くの種を観察することが可能であろう。

テーマとして鳥を提案した理由はそれだけではない。私自身が小学校六年生の夏の自由研究で、鳥について調べて発表したことがあるばかりか、進歩していないことに、大学での卒論のテーマも鳥だった。(タイトルは、『八ヶ岳演習林における鳥類群集と植生』)そのため、野鳥の観察であれば適度にアドバイスもしてあげられると思っただのだ。

しかし、鳥は「あんまり興味ない」と、あっさり却下された。

「じゃあ、今年の夏は何を調べたいの?」

と尋ねた私に、元氣よく娘が応えた。

「ヤモリやりたい！」

娘は、今までに何度も境内でヤモリと出会っている。ヤモリは夜行性なので、夜間に照明の近くの壁にへばりついていたので見たことがあるのはもちろんのこと、日中でもブロック塀や狛犬の石の間などに隠れていたヤモリを見つけたことがある。低学年の時には、娘が自分でブロック塀の間で見つけたヤモリを、宿題の絵日記に描いていた。

かつてこんなこともあった。娘が三年生の時、まだ二月下旬の寒い季節のことである。銀行に持つて行くために神社の賽銭箱の中を出した時、冷たい硬貨に埋もれた状態で、小さなヤモリの姿が見えた。かわいそうに、と思った瞬間、驚いたことにその子どもヤモリがモゾモゾと動き始めた。何と生きていたのだ。小銭に挟まれたこの状態で何日間も、いや、ひよっとしたら一か月近くも閉じ込められていたかも知れないというのに。たくましいものである。シヨウジョウバエ等を与えながら少し暖かくなるまで社務所で保護し、娘と見守り続けて春に放してあげた。

これらの出来事からも、娘が少なからずヤモリに興味を抱いてきたのは、確かなことなのである。そう考えると、神社の境内をフィールドとした、小学校最後の夏の自由研究テーマとしては、うってつけかも知れないと思った。

そもそも私は、娘がヤモリを自由研究のテーマとすることには、

全く異存はなかった。というのも、実は私にも小学生時代に、ヤモリを数匹捕まえて飼育した経験があったからである。ヤモリの外見が醸し出す可愛らしさ、垂直な壁面でも歩ける不思議さ、餌を捕食するときのダイナミックさは、観察した私自身がよく実感している。特に、真正面から見たヤモリの顔の可愛さは、飼育してじっくり観察した者にしか絶対にわからないであろう。さらにその飼育中に、忘れられない出来事が起きた。一匹のヤモリが二個の卵を産み、何とそのうちの一個から赤ちゃんヤモリが誕生したのだ。ヤモリを産卵、孵化させたことにとっても感動したという、貴重な体験もしているのである。ひよっとしたら、娘以上に夏休みを楽しみに待っていたのは、他ならぬ私だったかもしれない。

二、ヤモリとは

(一) ヤモリの分類

まず、ヤモリとはどのような生き物なのかを簡単に紹介したい。なお、娘が観察対象としたヤモリは、正確にはニホンヤモリ(学名 *Gekko japonicus*) というが、本稿では単にヤモリと表記する。

さて、そもそも我々ヒトを含めて、脊椎骨(背骨)をもつ動物を脊椎動物といい、ヤモリなどの爬虫類もその中に含まれる。その脊椎動物の教科書的な系統を図1に表した。また、ヤモリなどトカゲの仲間の分類は専門家でも諸説あるが、その一例が図2である。

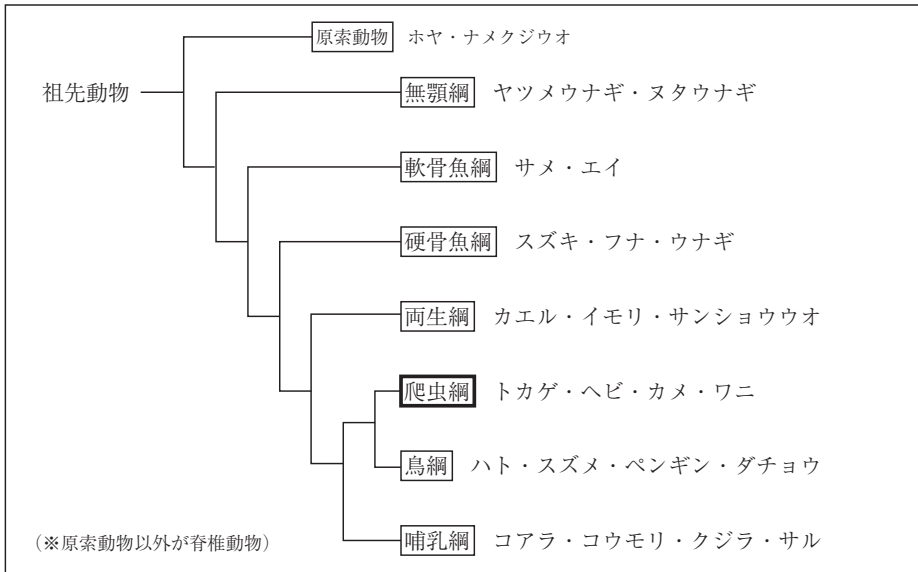


図1 脊椎動物の系統樹

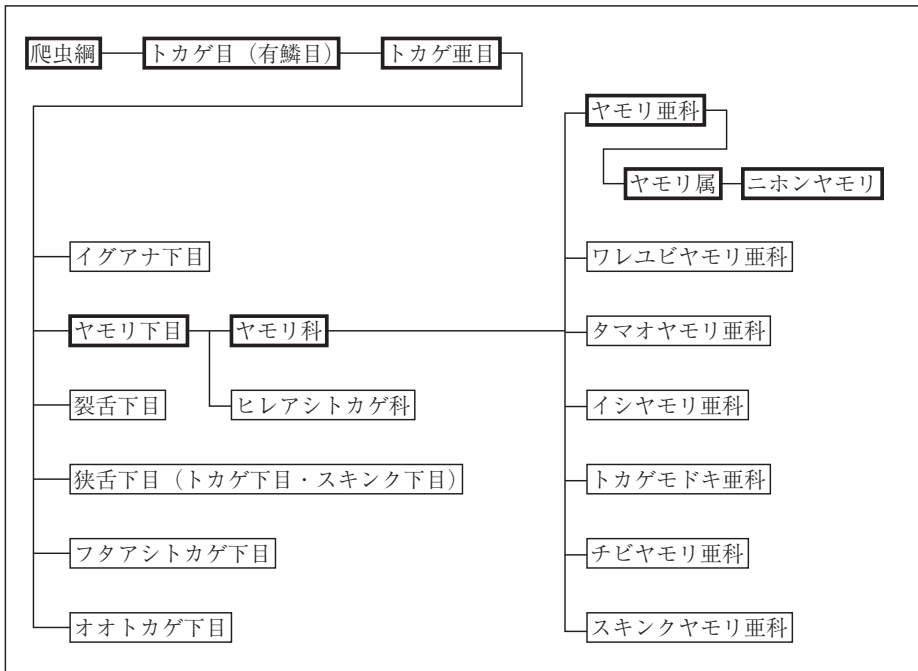


図2 ニホンヤモリの属する分類の一例

世界のトカゲ亜目は約五、五〇〇種で、そのうち一、三〇〇種以上がヤモリ科といわれている。ヤモリ科といってもその形態や生態は様々で、近年では見たこともない外国産の種もペットショップでよく見かける。ヤモリ科のうち、私がイメージするヤモリとは明らかに雰囲気異なる「トカゲモドキ亜科」などは、別科として分類されることもある。私としてはやはり、パツと指を開いた手足がモミジの葉っぱのように可愛くて、壁をチョロチョロと歩き回り、目がパチッと大きいのがヤモリの特徴であり魅力だと思う。因みに、ニホンヤモリ（ヤモリ亜科ヤモリ属）以外にも、日本にはヤモリ亜科に含まれるヤモリが十数種生息しているほか、徳之島以南の南西諸島にはトカゲモドキ亜科が数種分布している。

ところで、ニホンヤモリの分布域は、日本以外にも韓国、中国東部、ベトナムなどと広い。したがって、和名でニホンヤモリとはいふものの、日本の固有種というわけではない。また、学名の中の種小名に *japonicus* とあるのは、かつて江戸時代に来日したあのシーボルトが、このヤモリを新種として報告したからだといわれている。

ニホンヤモリが日本に渡来して定着した時期は定かでないが、一説には平安時代以降とされている。ニホンヤモリを外来種だという人がいるが、環境省の外来生物法によれば、明治以降に日本国内に入ってきた種を「外来生物」と規定している。そのため、明らかに

明治以前に入ってきたニホンヤモリを外来生物（外来種）と呼ぶには語弊があるといえるだろう。

一般にヤモリは、広い地域に拡散し、新しい環境に適応して繁殖しやすい動物だと考えられる。流木や船の積み荷などにまぎれて新天地に運ばれる可能性は十分あるであろうし、ニホンヤモリの場合、比較的南方系の爬虫類よりも少々の温度変化には強いように思う。また、単為生殖（受精せずにメスだけで子を産むこと）を行うともいわれており、分布域を効率よく広げてきやすかったことは想像に難くない。

実際、ヤモリ（厳密にはヤモリ属だけでなく、ホオグロヤモリなど近縁のナキヤモリ属なども含む）を海外で見かける機会が多い。私の場合、一人旅で初めての国に着いたとき、空港やホテルなどでヤモリを見かけると、ついホツとした気持ちになる。と同時に、その訪問地が特に絶海の孤島だったときには、こんなところはまだよく分布しているものだと、そのたくましさに感心せずにはいられない。彼らの環境適応力は、爬虫類の中でもトップクラスだと思う。

（二）ヤモリとイモリの違い

ヤモリは、よくイモリと混同される。名前が似ているために間違われることが多いのだが、具体的にどのよう異なるのかご存じでしょうか。

かつて、テレビの動物番組にもよく出演されていた爬虫類学者の

千石正一氏は、ヤモリとイモリは、鳥のスズメと魚のスズキくらい差があると言っていた。同じ「脊椎動物門」に属するというだけで、名前が一字違うことで次の「綱」という分類段階から異なってしまうためである(図1参照)。

イモリとヤモリの生物学的な違いを、表1にまとめた。名前が似ていても全く異なることがわかるであろう。皮膚がぬれていて水中から出ないイモリよりは、身近なところに出没するヤモリの方が親しみを持つると思うのだが、いかがだろうか。

なお、イモリの写真(写真2)は、國學院高等学校の生物部で飼育しているイモリにモデルになってもらった。

三、調査地 再び馬込八幡神社

(一) 境内の概要

今回の調査地、馬込八幡神社は、私が現在欄宜として務めている神社である。その歴史や境内の植生については、かつて『外苑春秋』第三号掲載のエッセイ、『ヒキガエル狂騒曲』にて詳しく紹介した。そのため、そちらを参照していただきたい。ここでは、境内で、過去にヤモリを見たことのある場所の説明のみに限定したい。

夜行性のヤモリは、昼間は物陰にひっそりと隠れている。昼間にヤモリを見かけたことがある場所は、図3の中の、ブロック塀の隙間や、狛犬の土台となっている石の隙間などである。しかし、必ず

いつも同じ個体と同じ場所にいるというわけではない。安全で居心地のよい場所を求めて、しばしば移動するようである。

夜になると、ヤモリはエサを捕るために、照明のあるところやつて来る。ヤモリは昆虫類を食べるため、光に集まる昆虫を目当てに、外灯付近へとやって来るのである。神楽殿の横にある外灯近くが、ヤモリを夜間に比較的に見かけること多いポイントだ。うちの境内の神楽殿は、補修してもしきれないくらい古い建物で、あちこちが隙間だらけの木造建築である。おそらく昼間は、どこかその神楽殿の中に潜んでいるに違いない。

(二) 調査地としてのメリット

一昨年のヒキガエルの研究の時には、うちの境内を調査地としたメリットを心から実感した。というのは、何ととっても距離的に近い。そのため、夜間でも小学生の娘を連れて、とても気軽に観察、調査に行けるということや、誰に気兼ねすることもなくキャッチもリリースも気楽にできるといふあたりがたまたまからである。これが人様の土地や、公共の場所ではそうもいくまい。そう考えると、これは非常にありがたいメリットだと思う。

また、今回はヤモリを何日も飼育したが、その間のエサ捕りも近場で済ませることができた。小学生時代にヤモリを飼っていたときは大変だった。当時大阪の団地に住んでいた私は、エレベーターもない団地の階段を何か所も上り下りして、苦勞してガなどの昆

表1 ヤモリとイモリの違い

	ヤモリ	イモリ
正式和名 (学名)	ニホンヤモリ (<i>Gekko japonicus</i>)	アカハライモリ (<i>Cynops pyrrhogaster</i>)
外見	 写真1 ヤモリ	 写真2 イモリ
分類 (諸説あり)	脊椎動物門 爬虫綱 トカゲ目 ヤモリ科 ヤモリ属 (トカゲやヘビなどと同じ爬虫類の仲間)	脊椎動物門 両生綱 有尾目 イモリ科 トウヨウイモリ属 (カエルやサンショウウオなどと同じ両生類の仲間)
漢字表記	「守宮」または「家守」(「壁虎」とも書く。)	「井守」(「蝾螈」とも書く。)
皮膚	色は、背も腹も灰色か茶褐色。常に乾燥している。	色は、背は黒褐色で腹は赤色。常にぬれている。
目の瞳	縦長で、特に日中は細い。	円形。
指の数	前肢、後肢とも5本。	前肢は4本、後肢は5本。
幼時の形態	基本的に成体に類似。	カエルと同様にオタマジャクシ状の幼生。
生息場所	一生を通じて陸上。	一生を通じて水中。
卵	固い殻に包まれた卵を、陸上で産卵。	柔らかいゼリー質で包まれた卵を、水中で産卵。
動きの様子	垂直の壁に貼り付くことができ、素早く走ることができる。	水中で歩いたり泳いだりする。動きは遅い。



写真3 神楽殿横の外灯



写真4 ブロック塀の隙間

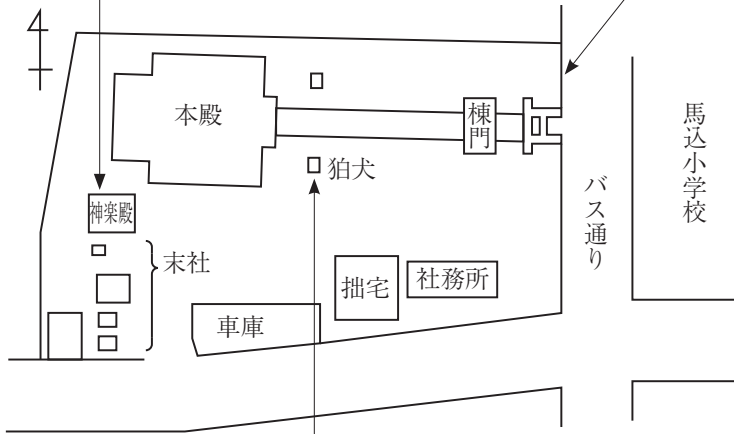


写真5 狛犬の石の隙間

図3 今までのヤモリ目撃地点

虫を集めた。子供だから頑張つてできたのだろう。そのようなエサ集めは、今では体力的にも時間的にも無理だ。こういう時、身近に虫が集まる環境があるというのはいいものである。

しかし、逆に考えれば、もっと自然度の高い神社、例えば様々な樹種からなる広い森林を境内や周囲にもつ神社とか、池のある神社などでは、さらに多くの生物種を対象に研究ができるであろう。自然環境を維持するのは大変なことと思うが、生物学で飯を食っている者からすれば、そんな境内に住める神主さんはうらやましいものである。

四、夏休みに向けて

(一) 実験および事前調査計画

娘の通う小学校では、平成二十六年年度の一学期の終業式は七月十八日(金)であった。そこで、翌十九日(土)からヤモリの自由研究を効率的にスタートすべく、娘と私は、七月に入ってから事前計画を練り始めた。

まず、捕獲したヤモリを使ってどのような観察、実験をするのか、いろいろな案を娘に考えさせた。とはいえ、その多くは、二年前のヒキガエルで行った実験と似たようなネタになってしまった。たとえば、まず、体長や体重の測定だとか、エサを食べる様子や、歩いたり走つたりの基本的な行動の観察だ。歩き方では、前回と同様に絵

の具をつけて歩かせる実験を考えた。また、ヤモリが泳げるかどうか調べることにした。私も、ヤモリが泳ぐところなど見たことがない。これもヒキガエルのときと同様に、衣装ケースに水を入れて実験することにした。その他、ヤモリがどれくらい重い物を持てるのかも調べてみたいということで、方法を検討することにした。

室内での観察、実験の案を練るとともに、それに協力してくれるヤモリを効率よく採集するために、ヤモリの出現場所も事前に調査することにした。そして、娘が夏休みに入るまでの間、境内のどこにヤモリが出現したかをほぼ毎晩調べた。(ただし、夜遅い時などは、私が一人で調べに行くことも少なくなかった。)その結果は、次のコーナーで紹介したい。

(二) 夏休み前の調査記録

前述のように、七月になってから夏休みに入るまでの間、ヤモリの出現状況を調査した。その結果、十四回の事前調査のうち最も多く現れた場所は、神楽殿の横の外灯近くで、十二回も確認できた。続いて、本殿裏の壁面数か所にも出没する頻度が高かった。(表2および図4参照。)

これらの調査結果を踏まえて、夏休みの初日にいよいよヤモリを捕獲しに行くこととなった。

表2 事前調査の結果

調査日	調査時間	天候	気温(℃)	湿度(%)	出現場所とサイズ・出現数
7/1(火)	23:00~	曇	26.9	49	A(シュロの葉の裏) 大・1
7/2(水)	23:00~	曇	26.1	49	B(神楽殿の外灯近く) 大・1
7/3(木)	22:30~	雨	-	-	現れず
7/6(日)	21:30~	曇	26.7	50	B C(狛犬の石の隙間) 大・1 小・1
7/7(月)	22:00~	曇	27.0	56	B C 大・2 小・1
7/8(火)	21:00~	曇	26.8	46	B 大・2
7/9(水)	23:00~	雨	-	-	B D(本殿南側の壁面) 大・3 小・1
7/10(木)	21:30~	雨	-	-	B E(本殿西側の壁面) 大・1 中・1
7/11(金)	22:00~	曇	25.2	53	B F(ブロック塀) 大・2 中・1
7/12(土)	22:00~	曇	28.5	49	B C E 大・2 小・1 中・1
7/13(日)	21:30~	曇	27.5	57	B E 大・2 中・1
7/14(月)	22:30~	曇	27.9	55	B 大・2
7/15(火)	22:00~	晴	29.1	59	B G(本殿北側の壁面) 大・2 中・1
7/17(木)	21:30~	曇	27.3	51	B G 大・1 中・1

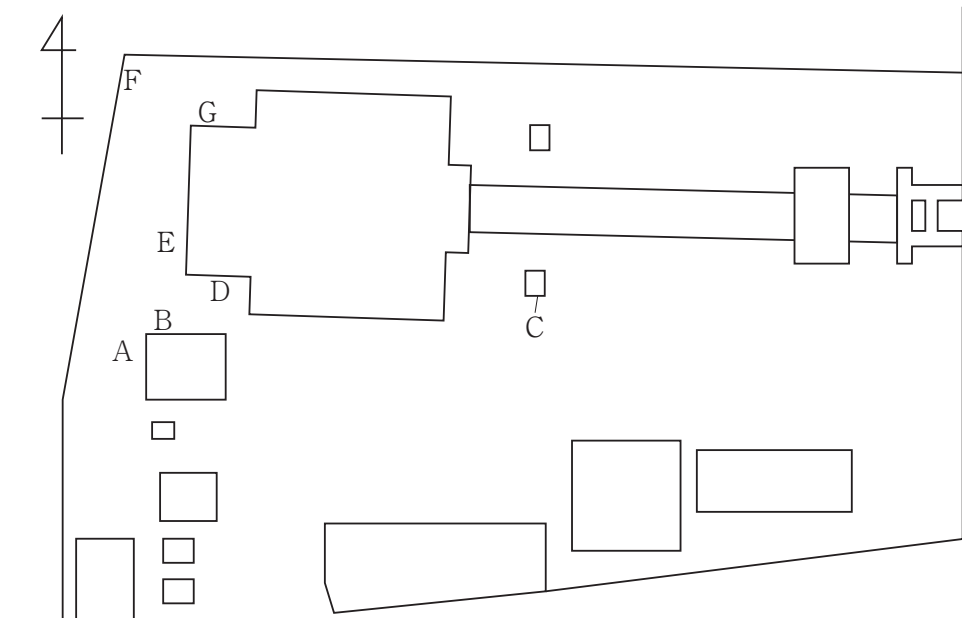


図4 事前調査での観察地点



写真6 いよいよヤモリの採集へ

五、ヤモリがうちにやって来た

(一) うちに来たヤモリたち

さあ、一学期の終業式も終わり、娘にとって小学校で最後の夏休みがやって来た。七月十九日(土)、今夜決行するヤモリの採集に向けて、水槽等の飼育用具を準備する。

夜十時、娘と境内に出発。今までの事前調査でも用いた温湿度計付きデジタル時計(雨天時以外はこれを神楽殿横に設置して記録してきた。)に加え、今回は捕虫網と水槽を持って外へ出る(写真6)。因みにこの夜は、気温二十五・八度、湿度六十一パーセントで、曇りだった。

七月に入ってからヤモリ発見場所を参考に、境内を巡視する。すると今夜は、神楽殿横の外灯に大きいヤモリ二匹、本殿の西側壁面にある古い電気メーターのところに一匹の中形サイズのヤモリを見つけた。おそらく最近出沒していたヤモリと、それぞれ同一個体であろう。一匹には逃げられたものの、大形ヤモリのうちの二匹と中形ヤモリを採集する。

ところで、ヤモリの性別は、ある程度成長したヤモリの場合、尾の付け根の幅で識別できる。この日連れてきた二匹のヤモリは、大きい方がオス、中くらいの方がメスだった。娘にヤモリの名前を付けさせたところ、オスは「信長」、メスは「お濃」と命名された。

さて、このヤモリたちであるが、二年前のヒキガエルのときと同様に、自宅と隣接する社務所へと持ち帰った。そして、この社務所を舞台に、ヤモリの飼育と観察が始まった。ただ、ヒキガエルの場合と大きく異なるのは、ヤモリはすばしっこい生き物だということだ。水槽から出す際には、逃がさないように常に注意を払う必要があった。また、ヤモリの尾は切れやすいという特徴があるため、娘も私も、絶対に尾をつかまないように気を付けた。

後日、さらに二匹のヤモリが社務所にやって来た。一匹は、七月二十四日(木)、神楽殿横の外灯のところから連れてきた、信長よりも大形のメス、もう一匹は、七月二十七日(日)、神楽殿裏のエノキの幹にいた大形のオスである。後からやって来たこの二匹には、娘によって「おね」、「秀吉」という名前が付けられた。この四

匹を観察してわかったことは第六章で、実験してわかったことは第七章でそれぞれまとめてお伝えしたい。

(二) ヤモリの飼い方

幸いなことに、今回の自由研究で対象となったヤモリなる生き物は、飼育が簡単である。百円ショップでも売っているようなプラス

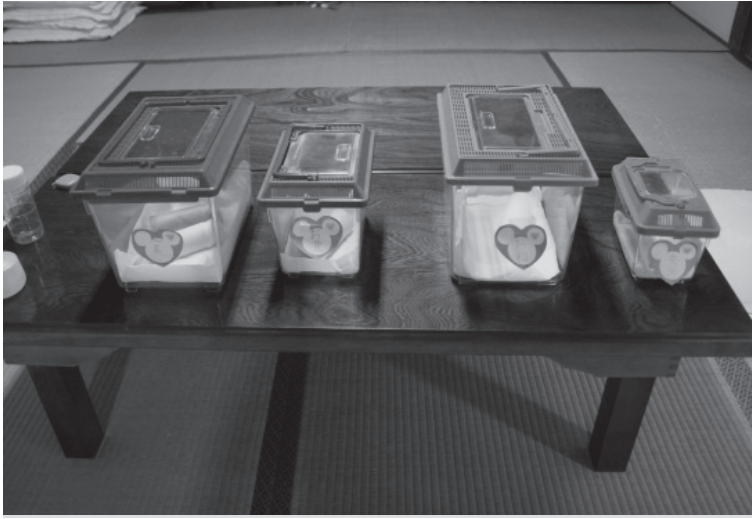


写真7 4部屋に分かれてチェックイン

チックの水槽さえあれば十分だ。ただし、逃げ出さないように、蓋はしっかりと閉まるものでなければならぬ。

水槽内のヤモリを観察しやすいことと掃除しやすいことを念頭に置き、水槽の底にはキッチンペーパーを敷いて、置きやすいように半円型に潰したトイレトーパーの芯を、ヤモリの隠れ場所として入れた。

たったそれだけである。夏のこの時期には、温度調節も特に不要だ。この点、国産の生物は扱いやすくてありがたい。あとは適宜霧吹きで水分を与え、エサとして生きた昆虫類などを境内で捕ってき与えればよい。なお、ヤモリ一匹一匹が食べたエサの量がはっきりわかるように、水槽を四つ用意して、一匹ずつ分けて入れた(写真7)。

かくして、シングルルーム四部屋に滞在することとなった信長、お濃、おね、秀吉とのひと夏の日々が始まったのである。

六、観察してわかったこと

(一) 身体計測

信長、お濃、おね、秀吉には、それぞれ社務所にやってきたその日に、身体計測を実施した(写真8・9)。その結果は、表3の通りである。

なお、口先から尾の付け根までの長さを頭胴長といい、尾の付け根から尾の先までを尾長という。そして、頭胴長と尾長を足した長

表3 ヤモリの身体計測の結果

名前	性別	測定日	頭胴長(cm)	尾長(cm)	全長(cm)	指の長さ(mm)	体重(g)
信長	オス	7/19(土)	5.5	5.5	11.0	5~7	3.46
お濃	メス	7/19(土)	4.5	4.8	9.3	3~4	2.02
おね	メス	7/24(水)	6.5	7.0	13.5	6~7	6.39
秀吉	オス	7/27(日)	5.7	5.5	11.2	5~7	4.14

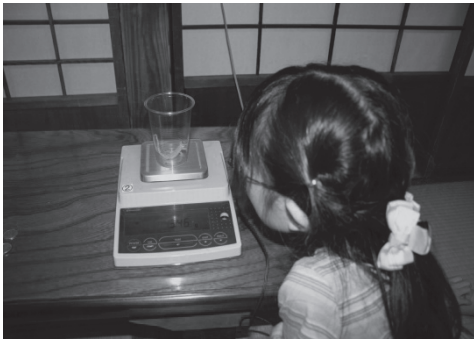


写真9 電子天秤で体重測定



写真8 4匹とも身体計測を行う

さ、つまり口先から尾の先までの長さを全長という。

さて、ヤモリの体重についてであるが、ヤモリがとても軽い生き物であることは経験的に知っていた。そのため、ヒキガエルのようなキッチンスケールは、おどろば過ぎてとても体重測定に使いそうもない。そこで今回は、夏休みに入る前に職場から電子天秤を借りてきた。これを用いることで、100分の1グラムまで量ることが可能となる。

測定の結果、100グラムを超える個体が多かったヒキガエルに比べて、ヤモリが体長の割に非常に軽い生き物かがよくわかった。特に、最も軽かったお濃は、たったの2・02グラム。一円玉二枚分とほぼ同じである。この体重の軽さが、壁面でも自由に動き回れる秘密の一つといえるだろう。

(二) 体の特徴

ヤモリの身体的な特徴についておそらく誰もが最も不思議に思うのは、垂直な壁やガラスでも歩ける独特の手足ではないだろうか。タコやイカのような吸盤があると思っている人がいるかもしれないが、別にあのような丸っこい吸盤があるわけではない。手足の指の裏をよく見ると、たくさんひだが何列も並んでいるのがわかる(写真10)。そして、肉眼では見えないが、そこには一面に絨毛が生えており、さらにその先端は細かい毛となり分岐している。電子顕微鏡でなければ到底見えないくらい細かいこの毛に、重要な秘密が隠されているのだ。この構造によってファンデルワールス力という

力が生じ、その力でヤモリは接着しているということである。



写真10 指の裏に吸盤はない



写真11 日中の瞳は細い



写真12 夜間の瞳は太い



写真13 信長(オス)の尾の付け根は太い



写真14 お濃(メス)の尾の付け根は細い

生物の体の構造や仕組みを工業製品に応用しようとする技術をバイオミメティクス(生物模倣技術)といい、古いものではオナモミの実からヒントを得て作られたマジックテープがある。近年、この分野の研究が急速に発展してきた。例えば、ハスの葉から布の撥水加工、カの口から痛くない注射針、カタツムリの殻から汚れにくいタイル、鳥やチョウの羽から高効率のファンが開発されたほか、我が国日本の新幹線にもカワセミを模した先頭車両やフクロウの風切羽の構造を活かしたパンタグラフが導入され、空気抵抗と騒音の削減に効果を上げている。そして、このバイオミメティクスの一つが、ヤモリの手足をヒントにしてカーボンナノチューブを高密度に集めて作った接着テープなのである。

自然の仕組みを解明し、人工的に再現する技術も素晴らしいが、

長大な年月をかけてそのように進化してきた生物の不思議さ、奥の深さを、ヤモリたちは改めて感じさせてくれる。

パッチリした大きな目もヤモリの特徴だ。まぶたはなく、縦長の瞳を開いたり閉じたりして、目に入る光の量を調節している。明るい日中は瞳を細め、夜間は太く開いて多くの光を取り込もうとしている(写真11・12)。これはヒトの目でも行っている調節で、特にネコでは顕著に瞳の違いを観察できる。

まぶたがないだけに、ヤモリは目の清潔さには気を遣っており、ときどき長い舌でペロペロなめて掃除している。これは次のコーナーで詳しくお伝えしたい。

ちなみに、同じトカゲ類のニホントカゲやカナヘビ、イグアナなどにはまぶたがある。

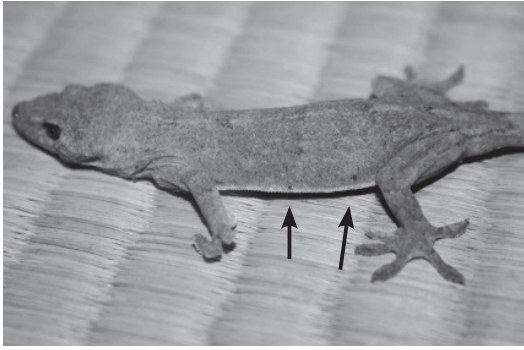


写真15 おねの体表のダニ

耳は、他のトカゲ類と同じように、顔の横についているのが見てすぐわかる。ついでながら、トカゲから進化して生じたヘビ類には、耳もまぶたもない。手足と同様、退化してしまったようである。

口には歯はない。捕獲した際に指をかまれることもあるが、カメラほど顎の力も強くないので、全く痛くはない。また、口は顔の側面まで大きく広がっているものの、口角がわずかに上がっているのか、正面からヤモリの顔を見るとニコツと微笑んでいるように見える。舌をペロツと出せばペコちゃんのように、なお可愛い。この表情を見て癒される思いを感じるのには、私たち親子だけではないであろう（口絵写真）。

ヤモリのオスとメスの違いについては、第五章でも書いた通り、尾の付け根を見ればすぐに識別できる。オスでは太く、メスは細い（写真13・14）。しかし、これはある程度成長してからのことで、幼い頃には違いはまだはつきりわからない。

爬虫類であるヤモリの皮膚は、うろこで覆われている。このヤモリのうろこが非常に細かいため、手触りはザラザラよりはスベスベに近い感じがする。

ところで、捕獲したばかりのヤモリの皮膚には、赤いつぶつぶが付いていることがある。ダニである。この夏うちんにやって来たヤモリの中では、秀吉に少々と、何故かおねには何匹も目立って付いていた（写真15）。

「かわいそうだから、とってあげて。」と娘に頼まれる。観察させてもらうお返しにと、二匹ともピンセットで全て綺麗に除去してあげた。

(三) 生活の様子

普段ヤモリたちは、水槽の中でどのように過ごしているのだろうか。

日中は、蓋の裏にへばり付いていたり、隠れ場所に入っていたり、水槽の底に敷いたキッチンペーパーに潜り込んだりして、基本的にはじっとしている。朝、最初に水槽を見た時、信長はいろいろな場所にいたが、お濃は比較的蓋の裏にいたことが多かった。一

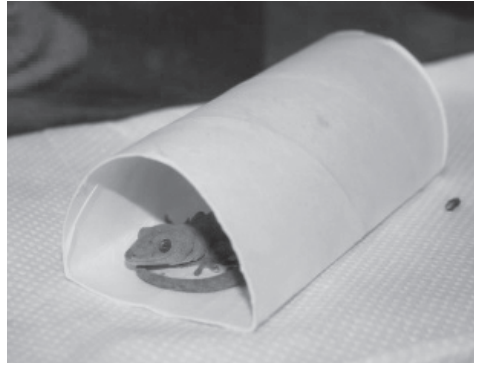


写真16 隠れ場所でくつろぐおね

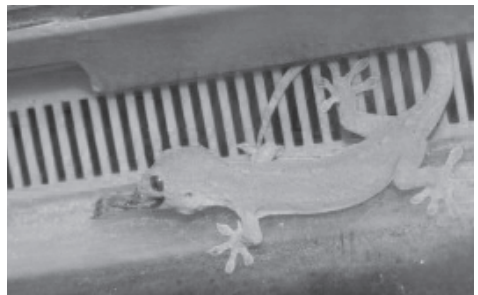


写真17 おねがガを捕らえた瞬間



写真18 顔に付いた水滴をなめるおね

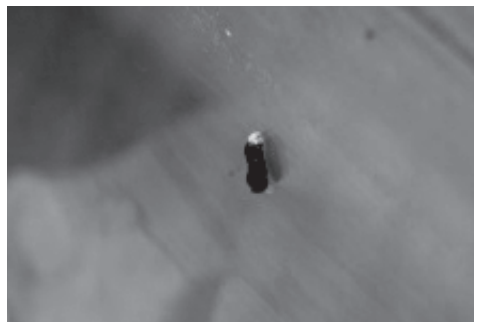


写真19 ヤモリの糞(白い部分は尿)

方、おねや秀吉はトイレットペーパーの芯で作った隠れ場所に入っていることが多かった。ヤモリにはまぶたがなく目が開いたままなので、寝ているのか起きているかは不明である(写真16)。

夜になると、ヤモリたちは活発に行動し始める。その目的の一つは、エサを食べることである。我々はほぼ連日、夕方から夜にかけてハエやガなどの昆虫を採集し、なるべく均等に四匹の水槽に入れた。すると、エサの存在に気が付いたヤモリは、ゆっくりと慎重に近づいていく。そして、ある程度の距離まで接近すると、目にも留まらぬ速さでパクッと食いつくのである(写真17・口絵写真)。興味深いのは、ブンブン飛び回るカサエもいつの間にか食べてしまうことで、水槽に入れた後すぐには食べなくとも、朝までには綺麗に無くなっていた。境内のハエやカなどの害虫を食べてくれたという

点で、まさに「守宮」であり「家守」だと思う。
 なお、飼育期間中に、誰にどれだけのエサを与えたかは、第九章でまとめた。

生物である限り、水分の摂取も不可欠である。そこで、時々霧吹きで水槽の壁に水を吹き付けた。すると、ヤモリはそれを舌でペロペロとなめた。この様子がまた、とても可愛い。顔にも水滴が付いたりすると、顔も目も一緒にペロペロとなめていた(写真18)。

エサの食べ方と水の飲み方について書いたところで、今度は逆に、出す方の話に移るとしよう。つまり、糞と尿である。

ヤモリを飼育していると、水槽の中に頻繁に糞を見かける。健康的なことに、ヤモリはほぼ毎日糞をするようだ。それは、水槽の底

に落ちていることもあるし、壁面にくっ付いていることもある。大きいものでは、長さ1センチ、幅約0・3センチの細長い形をしており、黒い中にわずかに白い部分がある。それは、ヤモリの尿が固まった部分だ(写真19)。

食べ物の中のタンパク質が分解されると、アンモニアが生じる。このアンモニアは生体にとって有害な物質なので、ヒトの場合は肝臓の中で尿素という無害な物質に作り変えている。そして、その尿素を腎臓でろ過して濃縮し、尿に含めて排出している。これに対してトカゲなどの爬虫類では、アンモニアを尿酸という物質に変えて排出している。尿酸はわずかの水分とともに排出でき、すぐに固まる性質がある。したがって、発生過程の初期を密室状態である固い卵殻の中で過ごす爬虫類には好都合なのだ。卵殻内で排出された尿はコンパクトに収まり、卵内部の濃度変化にも影響を及ぼさない。これは鳥類でも同様で、鳥の糞とともに出された白い固まりは尿酸なのである。爬虫類が鳥類とかなり近縁な生物同士であることは、第一章の図1を見てもよく分かるであろう。

七、実験してわかったこと

(一) 絵の具をつけて歩かせる実験

二年前のヒキガエルでの実験の際、ヒキガエルに青い絵の具をつけて白い紙の上を歩かせたことがある。その結果、意外にもヒキガエルはほとんどジャンプせず、手足を使って地道に歩くことがよく

わかった。また、ふくよかなお腹を引きずらないで歩くことも明らかとなった。

では、ヤモリではどうだろうか。信長を用いて、ヒキガエルの時と同じように実験してみた(写真20・21)。その結果が図5・6である。これらの結果から、ヤモリは歩くときにはお腹を下に付けず、止まって休む時にはお腹を付けることがわかった。また、十五センチほどは軽くジャンプできることや、ジャンプ後に着地する際にはお腹をベチャッと付けることも、絵の具の跡に如実に表れていた。



写真20 絵の具を付ける前の信長



写真21 絵の具を付けた後の信長

(二) 水に入れる実験

絵の具の実験に続けて行ったのは、ヤモリを水に入れてみる実験だ。これもまた、ヒキガエルでの実験がヒントとなっている。産卵時に水に入ることのあるヒキガエルに比べ、ヤモリが水に入る状況など自然界ではまずないであろう。しかし、何かのはずみでヤモリが池や水たまりに落ちることもあるかも知れない。はたしてヤモリは水に浮き、泳ぐことができるのだろうか。これは、私も興味津々



図6 絵の具実験の結果 (2)



図5 絵の具実験の結果 (1)

の実験だった。



写真22 泳ぐ信長

前回と同様にプラスチックの衣装ケースに水を汲み、絵の具の実験でも協力してもらった信長をそっと水に入れた。信長にまた登場してもらったのは、続けてこの実験を行うことで、絵の具を綺麗に落としてもらおうと考えたからである。

信長は、まずプカプカと水に浮いた。顔を上げて両手両足を伸ばし、あたかもスカイダイビングをしているかのような恰好である。手足の指もパツと開いて、最も浮きやすいスタイルが本能的に分かっていくかのようだ。

間もなくして、信長は泳ぎ始めた。両手両足を動かし、尾も振って泳いだ。私がかつてガラパゴス諸島で見たウミイグアナは、両手



写真23 壁に上れない!

両足をピタッと後ろに伸ばし、尾を振るだけで悠然と泳いでいた。完全に海に適応したウミイグアナの余裕ある泳ぎ方に比べ、ヤモリは全身を使って一生懸命に泳いでいるという感じがした(写真22)。この実験を通して、軽いヤモリが水に浮かぶことができるのはもちろんのこと、ヤモリも確かに泳げるということがよく分かった。

もう一つ、この実験で判明した興味深い事実があった。衣装ケースの端まで泳ぎ着いた信長ではあったが、壁を上ろうとしても滑って上れないのだ。水にぬれると手足がくっ付かなくなるようである(写真23)。

だが、信長の手足をよく見ると、まだ青い絵の具が残っている。つまり、落ち切っていない絵の具が原因で壁を上れなくなったということも考えられる。そのため、後日、絵の具をつけずにおねを用いて同じ実験を行った。おねは、絵の具が手足に全く付いていない状態だったにもかかわらず、やはり滑って上れなかった。このことから、ヤモリは手足がぬれると滑ってしまい、壁にくっ付きにくくなることが分かった。

(三) ヤモリの模型を見せる実験

ある時、娘はヤモリのリアルな模型を、信長の目の前に置いてみた。かつて私と娘が二百円のカチャガチャで集めたマグネットの一つである。この時、単なるヤモリだけの模型に加えて、ヤモリがエサのガを口にくわえた模型でもやってみた(写真24)。しかし、模



写真24 信長がヤモリの模型を見たが…

型が視野に入っているはずにもかかわらず、信長は何の反応も示さなかった。ヤモリは縄張り争いを起こす生物といわれているが、全く動かない物に対しては、いくら形が似ていようと同種の個体とは認識しないものと考えられる。

また、普段エサをあげる時、水槽に入れた昆虫がじっとして動かなければ、ヤモリは反応しない。模型のガの部分に関しても、やはり動かないから反応しなかったのであるう。

(四) 呼吸数を測る実験

これもかつてヒキガエルで実施した実験である。どの動きを数えると、単位時間当たりの呼吸数がわかる。ヒキガエルで調べた場

合には、比較的大きな個体は呼吸数が少なく、小さな個体は多いという傾向があった。ヤモリではどうだろうか。

四匹それぞれの一分間での呼吸数を調べると、信長が六十七回、お濃が七十四回、おねが六十六回、秀吉が六十九回となり、全長の大小との明らかな関連性は見出せなかった。もっと極端に大ききの異なるヤモリで測定すれば、呼吸数と体格との何らかの関連性が判明したかもしれない。(なお、本来この手の実験の場合、数回カウントしてその平均値を出すのが一般的であるが、時間短縮のためビデオに録画して、再生中にカウントした。)

(五) 体の色を変える実験



写真25 色が薄くなったおね

ヤモリの色に関して、娘も私も疑問に思っていたことがある。うちに来たばかりのヤモリの色は濃かったのに、しばらく飼っているうちに色が薄くなってしまふことだ(写真25)。環境によって色が変わるのではない、最も体が大きくなって変化が確認しやすいおねの水槽の中を真っ黒にしてみた。壁、底、蓋の全面に黒い紙を貼り、トレットペーパーの芯で作っていた隠れ場所も、同じ大きさの黒い



写真26 内装を黒くしたおねの部屋



写真27 翳日のおねの色

紙で作って入れ替えた(写真26)。

翌日、おねの水槽の蓋を開けてみると、おねは、うちにやって来た時のように斑模様が目立つ黒っぽい色となっていた(写真27)。半ば予想していたことだが、その色の顕著な違いには、娘も私もびっくりした。この実験から、ヤモリは明るい環境に置くことで皮膚の色が薄くなり、暗いと周囲に合わせて黒っぽくなることが明らかとなった。

(六) 走る速さを測る実験

ヤモリといえば、チョコチョコとすばしっこいイメージがある。実際に、水槽から出して観察、実験している途中で、何度も逃げら

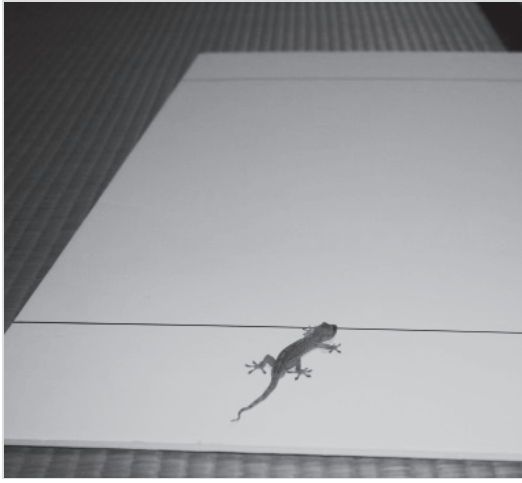


写真28 走る速さを測ろうとしたが…

れそうになっている。エサを入れる時や掃除する時にも細心の注意が必要なのだ。

では、このヤモリの走る速さは、いったいどれくらいなのだろうか。その測定にも挑戦した。

最初は、模造紙大の発泡スチロールの板に、スタートラインとゴールラインをマジックで書き、その間を走らせるのに要した時間をストップウォッチで計ろうとした(写真28)。

信長とお濃で実験してみたところ、大失敗に終わった。というのは、なかなか思ったようにスタートしなかったり、ゴールまで直進せずにストップしたりコースアウトしたりして、全く測定できな

ったからである。実験方法を再検討して、後日再実験することにした。

数日後、実験装置も参加者も変えて、再実験を開始する。今回の参加選手は、今まで身体測定や呼吸数の測定以外の実験には使ったことなかった秀吉である。

秀吉をこれまであまり実験に使ってこなかったのには理由があった。それは、四匹の中で秀吉が最もすばしっこく、水槽から出した時に他の三匹よりも明らかに逃走の恐れが大きかったからだ。また、捕獲した時に唯一「ククツ」と声を上げたのも秀吉だった。一番元気で活動的なのが、最後にうちにやって来たこの秀吉なのである。そのため、今回は今までは逆に、そんな秀吉のダッシュ力や持久力が期待されての出場となった次第である。彼なら止まったり曲がったりせずに、ゴールラインまで真っ直ぐに駆け抜けるに違いない。

今回走ってもらう場所は、社務所に敷いてある畳の上だ。単純に、畳の縁と縁の間をどれだけの時間で走破するかを測定する。前回行ったように直接ストップウォッチで時間を計るのでは誤差が生じやすい上、NGを繰り返すと疲れてタイムが落ちる可能性が高い。そのため、スタートからゴールまでをビデオカメラで録画し、再生した映像を見ながら時間を計ることにした。

その結果、秀吉は、畳の横二枚分(88センチ×2)を1・5秒で

走った。

$$176 \text{ (cm)} / 1.5 \text{ (sec)} = 704 \text{ (m)} / 60 \text{ (sec)} = 704 \text{ (m/min)}$$

$$= 4224 \text{ (m/h)}$$

すなわち、秀吉の速さは、時速4・2キロメートルとなった。

この数字だけを見れば、ヒトが歩く速度ほどしかないように見えるが、ヤモリの体長をヒトに換算してみたらどうなるだろうか。

秀吉の頭胴長（腰から頭まで）は5・7センチ、娘の座高は67センチなので、娘は秀吉の11・75倍大きい。したがって、秀吉が娘と同じ大きさになり、仮に単位時間当たりの走行距離も同じ比率で長くなったとすると、その速度は、

$$4.2 \times 11.75 = 49.35 \text{ (km/h)}$$

2時間ちよつとで42・195キロメートルを走るマラソン選手の二倍以上のハイペースということになる。

とはいえ、ヤモリにはやはり、長距離走よりは短距離走がよく似合う。短距離走者と比較してみよう。49・35キロメートルを1時間で走るということは、49350メートルを3600秒で走ることになり、これを100メートルに換算すると約7・3秒になる。小学生の娘の体格だとしても、あのウサイン・ボルトよりもはるかに速いということが分かり、遊び半分の単純な換算ではあったが驚きであった。

(七) その他ボツ企画

今回唯一予定通り進められなかった実験は、ヤモリの手足のくっつく力の測定だ。最初、文房具やおもちゃ、その他家庭内のいろいろな小物の重さを、あれこれ二十種類くらい電子天秤で計っておき、どれだけの重さのもので持つことができるかを調べようとした。しかし、ヤモリにも「持ちたくない」という意識が働くようで、用意した実験用具のほとんどを、持とうとはしなかった。

この実験に起用したおねが唯一持った実験用具は、10・78グラムの赤ボールペンだった。両足の指だけでくっ付けて、しばらくぶら下げたのである。おねは6・39グラムだから、体重の約1・7倍の重さの物を両足の指にくっ付けたことになる。

さて、これを娘の体重に換算すると、体重の1・7倍だと約36キログラムにもなる。

「36キロなんて、足で持てないよ。」

と言っていた娘だが、おそらくおねは、体重の1・7倍どころか、持つ気になればもっと重い物まで両手両足を使って持てたのではと思われる。まだまだヤモリのもつ能力の限界近くまでは厳密に調べられなかったということで、この実験については夏の自由研究には発表しなかった。

ここまでが、夏休み中に予定していた観察、実験である。しかし、これらの観察、実験を行っている期間中に、実は予期せぬ大事件が起きていた。

八、ヤモリの卵

(一) 大事件発生

それは、七月三十日(金)のことだった。信長とお濃がうちに来て十二日目、おねが来て七日目、秀吉が来て四日目のことである。

いつものように朝、四匹を観察すると、信長は隠れ場所の中にいた。お濃は壁面、おねは天井にそれぞれ貼り付いていた。そして、秀吉は床に敷いたキッチンペーパーの下に潜り込んでいた。この日は日中に数枚写真を撮影しただけで、実験は特に行わなかった。

そして、夜十一時過ぎのこと、境内で捕ってきたガやハエなどのエサをあげようと水槽に近づいた時、私は思いもせぬ光景に驚いた。おねが卵を産んでいたのだ。キッチンペーパーの上に、真っ白



写真29 産卵直後のおね



写真30 深夜の一大事に駆け付けた娘

い卵が一個産み落とされており、そのそばにいたおねは、まるで卵を守るかのように尾の先を卵に巻きつけていた(写真29)。

この夜は娘に頼まれて一人でエサの採集をしてきた私は、すぐ娘にこの重大事件を報告しに行った。

「大変大変、大事件だよ!」

「何が起きたの。誰か死んだの?」

「違うよ。おねが卵を産んでる。」

「エーッ!」

娘はバジヤマのまま社務所に駆け付けて、観察と撮影を始めた。

本来なら子供はそろそろ寝なければいけない時間であるが、一大事なので仕方ない(写真30)。

それにしても、私も娘もおねのお腹に卵があつたなんて、全然気が付かなかつた。それどころか、四匹の中で最も大きいおねには、いろいろな実験に協力してもらってきた。申し訳ないことである。卵を気遣うようにしっぽを巻き付けていたおねの様子を見ているうち、必ずこの卵が無事に孵化するまで見守ろうと、二人とも固く決心した。そして、我々は、このおめでたい卵についても急ぎよ自由研究の観察対象に加えて、観察を継続することにしたのである。

(二) 卵の測定と孵化への展望

おねの産卵の翌日、まずは卵の大きさを測定した(写真31)。その結果、長径が1・5センチ、短径が0・9センチであった。ニワトリの卵のように片方が少しがっている形ではなく、楕円に近い



写真31 卵の大きさを測定する

形である。

ここで、おねの体重測定を行ったところ、4・86グラムであった。一週間前にうちに来たばかりの時のおねは6・39グラムだったので、その差は1・53グラム。したがって、卵の重さは約1・5グラムということがわかった。(ただし、うちに来てからのおねに、激やせや激太りがないものと仮定した場合である。)

インターネットや書籍を通しての情報集めも行った。

まず、水槽内で産まれた卵をそのままにしておくと、親に踏まれて割れてしまうことがあるらしい。そこで、水槽の底に敷いているキッチンペーパーごと卵を取り出し、早々に別の水槽に移した。

また、通常ヤモリの卵は、二個産まれるようだ。確かに、私が小学生の時に飼っていたヤモリも二個産んで、そのうち一個だけが孵

化した。孵化に要した日数については全く覚えていないが、今回調べた資料の多くには、孵化まで約二か月かかると書かれていた。

さらに、こんな情報もあった。産まれた卵は最初は白いが、有精卵であればだんだんピンク色に変化していき、さらに内部が黒っぽくなっていくそうである。反対にこれが無精卵だと、徐々に黄色くなっていくらしい。

孵化まで二か月もかかるとなると、夏休みの自由研究の間では間に合わない。

そこで、とりあえずレポートには、観察した途中経過のみ記すことにした。おねの子どもは、はたして無事に誕生してくれるだろうか。

九、ヤモリ御一行、境内に帰る

(一) 御一行滞在中の全メニュー

予定していたヤモリの観察、実験が一応終わりに近づいた頃、娘と私はヤモリを放す日を決めることにした。この夏、家族で八月十三日から伊勢神宮方面に旅行する予定があるため、前日の十二日の夜に放すことにした。

ところで、ヤモリ御一行の滞在中、我々はほぼ毎日、境内で採集した昆虫などを与えてきた。時には仕事の関係や天候状態によって一匹も採集できない日もあったが、何かしら捕まえてきたときには、エサの数や大きさ、前回にあげた量などを考えて、なるべく平

表4 ヤモリにあげたエサ一覧

名前	7/20(日)	7/21(月)	7/22(火)	7/23(水)	7/24(木)	7/25(金)	7/26(土)	7/27(日)
信長	ガ 1	ハエ 1	ガ 2	0	0	ハエ 1	ハエ 1	ガ 1
お濃	ガ 1	ガ 3	ガ 2	0	0	ガ 2	ハエ 1	ガ 1
おね					0	ハエ 2	ガ 2	ハエ 1
秀吉								0

名前	7/2(月)	7/29(火)	7/30(水)	7/31(木)	8/1(金)	8/2(土)	8/3(日)	8/4(月)
信長	0	ハエ 1	ガ 1	ハエ 1	ガ 1	ハエ 1	0	ハエ 1
お濃	ガ 2	ガ 2	ガ 1	カ多数	カ多数	ハエ 1	0	クモ 1 ヨコバイ 1
おね	ガ 1	ハエ 1	0	ガ 2	ガ 1	ハエ 1	ガ 1	ハエ 1
秀吉	ガ 1	ハエ 1	ハエ 1	ハエ 1	0	ハエ 1	0	ハエ 1

名前	8/5(火)	8/6(水)	8/7(木)	8/8(金)	8/9(土)	8/10(日)	8/11(月)
信長	ガ 1	ガ 1	0	0	ヨコバイ 1	ハエ 1	ハエ 1
お濃	ガ 1	カ数匹 ガ 1	カ数匹	カ数匹	0	ガ 1	ハエ 1
おね	0	ハエ 1 ガ 1	0	ガ 1	0	ガ 1	ハエ 1
秀吉	ガ 1	ガ 1	0	0	ハエ 1	ガ 1	カ 1

上記の他にも、カヤクモなど少々あり。

表5 滞在中での体重変化

	信長	お濃	おね	秀吉
来た直後の体重	3.46g	2.02g	6.39g	4.14g
帰る直前の体重	3.28g	1.96g	4.84g	3.45g
滞在中の体重差	-0.18g	-0.06g	-1.55g	-0.69g

等に四匹にあげた。そのエサ一覧は、表4のとおりである。

(二) 意外な飼育結果

いよいよヤモリ御一行とお別れする夜、最後にもう一度、全員の体重測定を行った。その結果、とても意外な事実が判明した。

表5をご覧ください。驚いたことに、何と四匹が四匹とも、多かれ少なかれうちに来た時よりも体重が減っていたのだ。おねは産卵直後に4・86グラムに減っていたが、今回はそれよりさらに減っていた。

私は、いつも境内で捕まえた昆虫をヤモリたちにあげながら、自然界ではこんなに毎日に近いくらいエサを確実に捕れないだろうと思っていた。それに対して密室である水槽の中では、一度逃したエサであれ、翌朝までには捕まえられる。ヤモリたちは、滞在中は人為的に十分な食生活を送ることができたため、てっきり体重を増やして帰っていくだろうと考えていたのである。しかし、実際は逆だった。

表5のように、ヤモリ御一行の滞在中は、私なりに随分ハエやカを捕獲し続けた。言い換えると、境内の害虫を駆除し続けた。しかし、ヤモリが日頃から少しでも害虫駆除に尽力してくれているとすれば、これほどありがたい生き物はなかなかない。縁の下ならぬ壁の上の力持ちである。

八月十二日夜、娘と私は、御一行様四匹をそれぞれ採集した場所



写真32 ヤモリ御一行、境内に帰る

に連れて行った。またいつか、このヤモリたちに会える可能性は高い。これが身近なフィールドでのキャッチアンドリリースのメリットである。娘にいつまでも見送られて、ヤモリたちはそれぞれが来た場所へと帰って行った(写真32)。

十、卵のその後

(一) 卵の色の変化

八月後半、ヤモリたちの姿が見られなくなって、社務所はまた寂

しくなった。しかし、卵がまだ残っていた。

その後、卵には時々霧吹きで水をかけるだけして、あとはずっとそのままそっとしておいた。

さて、その卵の色であるが、産卵直後は昔ながらのニワトリの卵のように真っ白だった。しかし、一週間近く経つにつれて、全体的に少しピンクがかってきた。「ピンク色だからきつと有精卵だよ。」と、元来楽観主義者の娘は、孵化への期待を込めて言った。

そして、産卵後三週間ほども経つと、今度は卵の下部が少し灰色っぽくなってきた。

やがて八月は終わりを告げ、学校の二学期が始まった。娘は、表紙を含めて三十三枚にもなった自由研究のレポートを提出した。娘が付けたタイトルは、『ヤモリに隠された秘密とは?』だった。

ところで、娘の小学校では、毎年夏休み明けの九月、自由研究や作品についての発表会がある。今まで毎年クラスや学年の代表になってきた娘は、今年は早々から自分に投票しないよう根回しをしたようだ。大舞台での貴重な体験は何度も十分してきたし、今年は児童全体の前の発表よりも気がかりなことがあったからである。それは、言うまでもなくおねの卵のことだった。

観察を継続していたその卵であるが、産卵から一か月ちよつとが過ぎた頃には、ピンク色の部分はかなり減っていた。逆に灰色の部分が少ないとなり、濃くなってきたようだ。黄色くなるという無精卵の特徴とは明らかに異なるため、有精卵である可能性が高いよう

に思われる。

一日と時は経過し、産卵後二か月近く経った九月下旬には、いっしょにピンク色の部分はほとんど無くなり、全体が灰色っぽくなっていた。この小さな卵殻の中で、はたしてヤモリベビーの体づくりはどこまで進んでいるのだろうか。それよりも、本当にこの卵は無事に孵化するのだろうか。期待と不安が交錯する日々が続いた。

その後、明らかな変化が見られぬ中、とうとう九月の最終日も終わろうとしていた。(産卵後の卵の色の変化については、口絵ページをご覧ください。)

(二) 都民の日の慶事

そして、とうとう十月に入った。

十月一日(水)、都民の日。私は仕事がお休みの日であるが、娘が通っている大田区立の小学校は平常通り授業があるというので、夕ご飯の時間まで私一人でお出かけることにした。東京近辺はお休みの都民で混みそうだと思うため、少しだけ東京から離れた場所で、平日に空いていそうなところに行くことにした。

乗り鉄の私が向かったのは、静岡県の大井川鐵道である。何と自分の高校時代に乗って以来の、実に久し振りの乗車であった。

今回は土砂崩れのために終点の井川まで行けず、三駅手前の接岨峡温泉までの折り返しになったものの、秋の渓谷美を一人のんびり堪能することができた。特に最奥部を走る南アルプスあぶとラインは、私一人で列車一両を独占できるほど空いていた。

それはさておき、夕方家に着くなり娘に怒られた。

「携帯も持たないで、どこ行つてたの？ 大変だったんだよ！」

「いったいどうしたの？」

「ヤモリの赤ちゃんが生まれた！」

「ええーっ、本当？」

産卵の時とは反対に、今度は私が娘に驚かされた。喜び勇んで早速水槽まで行くと、卵の上の方に、綺麗に丸く穴が開いている。そして、水槽の蓋の裏には、小さい赤ちゃんヤモリが貼り付いていた（写真33）。今朝七時頃に卵を見た時には昨日と変わりなかったのに、娘が学校から帰ってくる午後四時頃までの間に孵化したのである。

本当に、ちょうど二か月で生まれてきた。生まれたばかりなのに、親と同じようにパツと開いた両手足の五本の指を用いて、ちゃんとくっ付いている様子が可愛い。おねの遺伝子をしつかり受け継いで生まれてきたことに感動する。それにしても、まさかこの年の都民の日が、おめでたい「慶事休暇」になるうとは思わなかった。

残念ながら電子天秤は職場にもう返してしまったので、生まれたてのベビーの体重は計れなかった。全長のみ測定したところ、四・七センチだった。うちに来たヤモリの中で最も小さかったお濃の、ちょうど半分の大きさである。他の動物の赤ちゃんと同様に体の割に頭でっかちなので、とても可愛らしく見える。

ところで、このヤモリベビーの名前も娘に考えさせた。

「本物のおねには子どもがいなかったんだよねえ。」

と考えた挙句、響きが可愛いからと、「茶々」に決まった。



写真33 「はじめまして、茶々です。」

後日、茶々は少し大きい水槽に移された。小さい茶々には、この時期にまだ境内に残っていたカや小さいガを捕ってきて、エサとして与えた。娘も楽しんで観察を続けた（写真34）。

しかし、十月は日一日と涼しくなっていく。徐々にエサとなる昆虫も少なくなっていくだろうし、いつまでもこのまま餌い続けることはできない。ペットショップからエサ用のコオロギの幼虫を買ってくることも可能であるが、

「カとかハエはいいけど、コオロギは可哀そうだからだめ。」と、娘に軽く却下された。

一方、私には十月末に職場の修学旅行の引率があるため、エサ取りの手伝いや飼育のアドバイスができなくなる。そのため、時期的



写真34 茶々を観察する娘



写真35 茶々、初めての旅立ち

かくして、ヤモリたちは全てが境内へと帰って行った。番号で呼び分けていた二年前のヒキガエルと違って、一匹ずつ名前を付けて

35)。初めて外の世界に出て、初めての壁をたくましく上っていく茶々。どうか末永く、この境内で生き続けてほしいものだ。

そして、いよいよ十月十八日(土)の夜、都民の日に生まれたニホンヤモリの茶々は、しばらく娘の手の上で名残を惜しんだ後、母親のおねと同じ神楽殿横の外灯の近くで放された(口絵写真・写真35)。初めて外の世界に出て、初めての壁をたくましく上っていく茶々。どうか末永く、この境内で生き続けてほしいものだ。

呼んでいたヤモリたちとは、より親しめたように思われる。ある資料によれば、ニホンヤモリの寿命は十年ほどだという。これからも暖かい季節には、信長、お濃、おね、秀吉、そして茶々はまた再会したいものだ。そして、一番若い茶々には特に長生きしてもらって、娘が成人した後も是非元気に顔を見せてほしいものがある。